

ジョージ・エリオット研究  
第二十三号

目次

〈論文〉

彼女の美は何を語るのか？—『ミドルマーチ』における沈黙の力  
..... 佐藤 エリ ..... 1

〈書評〉

Kathleen McCormack, *George Eliot in Society: Travels Abroad and Sundays at the Priory*  
(The Ohio State University Press, 2013) xiii + 178 pp.  
..... 小林 英里 ..... 17

Oliver Lovesey, *Postcolonial George Eliot*  
(Palgrave Macmillan, 2017) vii + 310 pp.  
..... 濱 奈々恵 ..... 23

木下未果子著 『共鳴するジョージ・エリオットとヴァージニア・ウルフ—  
「私」から「私たち」へ』（彩流社、2018年）294+viii頁  
..... 藤原 知予 ..... 31

〈書誌文献データ〉

日本におけるジョージ・エリオットの文献  
(2020年8月～2021年7月；2000年1月～2020年7月の補遺・訂正)  
..... 大嶋 浩 ..... 41

投稿規程 ..... 45

執筆者一覧 ..... 47

編集後記 ..... 大嶋 浩 ..... 48

## 彼女の美は何を語るのか？——『ミドルマーチ』における沈黙の力

佐藤 エリ

### はじめに

Virginia Woolf は、評論 “George Eliot” において、エリオットの “verbal felicity” について考察し、“She [George Eliot] allows her heroines to talk too much. . . Mrs Casaubon would have talked for an hour and we should have looked out of the window” (Woolf) と述べている。内に秘めたるエネルギーで、感情を豊かに表現する Dorothea は、Casaubon との結婚生活においては言葉を抑圧された状態となる。研究が袋小路に陥り、プライドからドロシヤにそれを悟られることの恐怖と、彼女と Will の仲への疑いから、カソーボンは自己の殻に閉じこもり、夫婦の溝は深まっていく。さらに心臓発作を起こした夫を動揺させることの恐怖から、「沈黙」することにより、彼女は結婚生活において自己を抑制し、自己犠牲的に義務を果たすことに邁進するようになる。<sup>1</sup> 一方 Lydgate 夫婦の結婚生活の窮状においても、リドゲイトが時に声を荒げることがあっても、Rosamond は概してそれを落ち着いて受け止め、むやみに反論することはしない。

Patricia Ondek Laurence は、「パワーとは常に相互作用的なものである」という Michel Foucault の概念を引き合いに出し、男性の話を「聞く」ように育てられてきた女性は、一見パワーを持たない存在のようでありながら、「静かな観察者・聞き手」として、「話し手」との関係において、時に同等の、またある時にはそれを超えた力を持つ可能性を指摘する (59-61)。現にリドゲイトが、彼女を男性である自分に比べて、か弱い存在だと考えていることを説明した後で、語り手は “Nevertheless she [Rosamond] had mastered him” (667) とロザモンドに軍配をあげる形で章を締めくくる。さらに “. . . and poor Lydgate was in a bad mood for bearing her dumb mastery” (740) とあるように、ロザモンドは沈黙を通じて時に夫を凌ぐこともある。<sup>2</sup> また彼女には、鋭い知覚力も備わっている。Vincy 家で新年の祝宴が催された場面において、他者のまなざしからは、彼女は夫を全く気に留めない “a sculptured Psyche

modelled to look another way” (642) のようだとされている。ところが、

In reality, however, she was intensely aware of Lydgate’s voice and movements; and her pretty good-tempered air of unconsciousness was a studied negation by which she satisfied her inward opposition to him without compromise of propriety. (642)

とあるように、ロザモンドは、他者の目に対し器用に無関心を装いながら、夫の言動を強く意識し、内心ではその反抗心をも満たしている。

先行研究において、豊かな精神性を持つドロシアに対し、概してロザモンドは内面の空虚さが強調されてきた。一方で、借金に伴う危機を解決しようと彼女なりに行動に出ることや、物語において、ロザモンドが彼女自身の成長だけではなく、他者の自己認識へ貢献することを評価するものもある。<sup>3</sup> 本論では、*Middlemarch* (1871-72) において、ロザモンドの沈黙が、結婚生活における彼女の在り方や、また彼女自身の変容にどのように関わっているかについて検証する。それにより、エリオットが、女性を従属の立場に追い込むような男女の二項対立とは異なる夫婦関係の複雑さと、女性同士の交流の肯定的な作用を描いていることを明らかにし、ロザモンドの自己に新たな光を照射したい。

### ロザモンドの肉体と発話行為

具体的な沈黙の機能について考察する前に、エリオットがロザモンドの発話行為と彼女の本質の関わりをどのように描いているかについて確認する。“by nature an actress” (117) と喩えられるロザモンドは、とりわけ公の場においては、無意識に感情をあらわにしたり、衝動に駆られて行動したりすることはなく、その“cleverness”を発揮し、周囲の状況に合わせて適切な言動をする術を身につけている。

Certainly, small feet and perfectly turned shoulders aid the impression of refined manners, and the right thing said seems quite astonishingly right when it is

accompanied with exquisite curves of lip and eyelid. And Rosamond could say the right thing; for she was clever with that sort of cleverness which catches every tone except the humorous. Happily she never attempted to joke, and this perhaps was the most decisive mark of her cleverness. (158-59; emphasis added)

ここで注目すべきは、ロザモンドの身体的特徴が、彼女の発話行為とも関わっていることである。「唇や眉のこの上なく素晴らしい曲線」は、彼女の口にする言葉もまた、驚くほどに「正しい」ものであるかのように思わせる。

For Rosamond never showed any unbecoming knowledge, and was always that combination of correct sentiments, music, dancing, drawing, elegant note-writing, private album for extracted verse, and perfect blond loveliness, which made the irresistible woman for the doomed man of that date. (268)

彼女は、その言動と完璧な金髪の美しさの組み合わせによって完成され、理想的な女性の鋳型にはめられたような存在である。一方でロザモンドは、その美しい身体にそぐうように、自らの言動を見事にコントロールできる人物でもある。更に彼女は、階級上昇を夢見て、リドゲイトにとって相応しいレディ像を作り上げようとする。

#### ロザモンドの身体性と沈黙

しかしながら結婚生活という新たな「舞台」へと参入したことによって、リドゲイトは、彼女が公の場にいた時に彼女を称賛のまなざしで見ている人々の中の一人ではなく、夫の立場から彼女を見るようになる。そして彼は次第に、自身が抱いていた理想のロザモンドと、現実の彼女の違いを意識するようになる。次に、ロザモンドの身体性と沈黙が、夫となったリドゲイトに対し、いかなる影響力を持つかについて考察する。

妊娠中のロザモンドが夫のいとこである Captain Lydgate と馬で遠乗り

出かけたことに対し、リドゲイトは怒り、二度とってはならないとを彼女に言い聞かせようとする。その時彼は“surely I am the person to judge for you. I think it is enough that I say you are not to go again” (584) と決然とした口調で彼女を諭し、それに対する返答を待っている。ローレンスは、歴史的に沈黙する立場へと位置づけられた女性は、観察し、知覚し、考える行為主体だとして、女性の沈黙が、必ずしも話者に対して女性の受動的な立場を示すわけではなく、それが従属的な地位に追いやられることを拒絶したり、相手の言葉に同意することを差し控えることにもなりうる、と指摘する (58, 64)。リドゲイトの遠乗りに出かけることを禁じる言葉に対し、ロザモンドは即答せずに、ただ鏡を見ながら髪を整えることに夢中になっている。夫として自分は「妻の行動を判断する人物」だというリドゲイトに対し、彼女はまず沈黙することで従属することを巧みに逃れている。

更に遠乗りについての会話が一旦中断された後、二人の間で以下のようなやり取りがなされる。

“I wish you would fasten up my plaits, dear,” said Rosamond, letting her arms fall with a little sigh, so as to make a husband ashamed of standing there like a brute. Lydgate had often fastened the plaits before, being among the deffest men with his large finely-formed fingers. He swept up the soft festoons of plaits and fastened in the tall comb (to such uses do men come!); and what could he do then but kiss the exquisite nape which was shown in all its delicate curves? (584-85)

ロザモンドは、リドゲイトの指示に対しての返答を避けた後で、彼に髪を結び上げるのを手伝わせる。彼女がお願いする時に用いる“I wish you would”は、先程のリドゲイトの強い言葉を和らげる効果がある。また彼女は、夫が野獣のように立ち尽くしているのを直接的に指摘するのを避けている。語り手は、いかにも男性らしさを象徴するリドゲイトの大きくてしっかりとした指が、ロザモンドの髪を結び上げることに驚きを示す。Rita Freedman は、男性と比べて女性は社会的に「美しさ」の基準によって判断され、それがい

かに心理的に女性の自己認識に影響を与えるかについて論じている。その中でフリードマンは、髪を整えることも、女性が「美しき性」であり続けるための行為の一つであるとしている。この行為がもたらす肯定的側面として、「見事な形に整えられた髪」が「見る人に快樂を与える」ことから、女性が「自己顕示的な力」を増す点を挙げる（82）。リドゲイトは知らず知らずのうちにロザモンドの「自己顕示的な力」を高める行為に加担させられるだけではなく、髪を高い位置に結び上げた結果、あらわになった彼女の首筋の美しさに魅了されている。その後、遠乗りに関する会話が再開するものの、最終的にリドゲイトは、この件についてロザモンドに委ねることに同意する。

そして借金によって夫婦関係に危機が訪れた際にも、こうしたロザモンドの力は保持される。ミドルマーチを去ることを提案したり、リドゲイトがもっと愛想よくしたりしていれば、リドゲイトのおじ Sir Godwin が手助けをしてくれたはずだというロザモンドに対し、彼はそのようなことをして馬鹿にされるようなことにはなりたくないと言った上で、“... Understand then, that it is what *I like to do*” (651) と自分がやりたいようにする、と強調する。それに対し、“*She immediately walked out of the room in silence, but with an intense determination to hinder what Lydgate liked to do*” (651-52) とあるように、ロザモンドは沈黙しながらも内心には夫のしたいようにはさせないという強い決意を秘めている。

借金について話さなければならぬと決意して帰宅した際、リドゲイトは、ロザモンドが自分が想像していたような理想的な妻ではなかったことと、ドロシアが夫への献身を通してみせる気高い魂を持った人であることを比べて失望感を感じている。しかしながら少し落ち着きを取り戻した時、リドゲイトはロザモンドの美しさに心を動かされる。

... her slim yet round figure never looked more graceful; as she sat down by him and laid one hand on the elbow of his chair, at last looking at him and meeting his eyes, her delicate neck and cheek and purely-cut lips never had more of that untarnished beauty which touches us in spring-time and infancy and all sweet freshness. It touched Lydgate now, and mingled the early

moments of his love for her with all the other memories which were stirred in this crisis of deep trouble. (593)

目の前にいるロザモンドの美に触発され、結婚前の記憶の中にいる彼女が、リドゲイトの精神においてよみがえる。この場面においてもロザモンドは無言で、それにより、彼女はただその美しさのみで、彼の感覚に訴えかける。フリードマンは、美しさが最も有用なのは初対面に限られ、親しくなると美しさの重要性は薄れていくというのは誤解であるとし、外見の持つ永続的な力について指摘する(7)。この場面において二人を繋ぐものは、ロザモンドの美という動かざる事実である。

リドゲイトは、“Lydgate’s anger rose; he was prepared to be indulgent towards feminine weakness, but not towards feminine dictation. The shallowness of a waternixie’s soul may have a charm until she becomes didactic” (650) とあるように、妻が弁舌を奮って夫に訓戒することを良しとしない男性優位の考えを持っており、ロザモンドの言うことを頑なに受け入れようとはしない。そうした夫に対し、ロザモンドは、直接的な言葉ではなく、身体と沈黙が持つ効果によって対峙するのだ。彼はロザモンドの内面が彼が期待したものではないと頭ではわかっているが、沈黙する彼女の美しさに視覚的にとらわれてしまい、かつての彼が抱いていた理想の女性像と切り離すことができず、混乱状態に陥っている。

リドゲイトのロザモンドに対するこうした認識は、皮肉にも彼が Madame Laure への恋において犯した過ちを想起させる。演劇という虚構の世界と現実の世界で隔てられていたリドゲイトとロールの境界は、ロールによる舞台上での夫の殺害事件をきっかけに、突如として取り払われることになる。彼女の無実を強く主張し、何度か彼女と接見する中で、リドゲイトの彼女についての印象が “She [Laure] talked little; but that was an additional charm. She was melancholy, and seemed grateful; her presence was enough, like that of the evening light” (152) と語られるように、ロールがほとんど話さないことが、彼女の魅力を一層高める。リドゲイトが「存在」だけでロールに満足していたことは、典型的に彼がロールを美しき「客体」として見ていることを

示す。突如 Avignon に拠点を移したロールの元をリドゲイトが訪問した時、彼女は彼を “the usual quietude” (152) で迎える。その「いつもの静けさ」は、リドゲイトにとっては「澄んだ水の深さのように美しい」とさえ描写されている。芝居の後リドゲイトを楽屋へ呼び出し、彼から求婚を受けた時にも、“Laure looked at him in silence with a melancholy radiance from under her grand eyelids” (153) とあるように、舞台を降りたロールには、常に「静けさ」や「沈黙」のイメージが付き纏っている。彼女が事件について告白する時、概して言葉数は少ない。しかしながらその対話の中で彼女が二度繰り返す “I meant to do it” (153) という言葉は、彼女が夫を意図して死に追いやったことを示唆し、リドゲイトを震撼させる。

これは後に、生活を切り詰めていくにあたって、夫婦の協力が必要であることをリドゲイトが説明し始めた時のロザモンドの “What can I do, Tertius?” (594) という返答を想起させる。さらにエリオットは、発話に伴う非言語的なメッセージの機能についても関心を示している。

That little speech of four words, like so many others in all languages, is capable by varied vocal inflexions of expressing all states of mind from helpless dimness to exhaustive argumentative perception, from the completest self-devoting fellowship to the most neutral aloofness. (594)

ここでロザモンドのこの短い言葉は “thin utterance” (594) と描かれ、またそこにはあらん限りの “neutrality” (594) が込められており、あたかも夫婦の問題を他人事のように捉え、夫への協力を拒絶することの表明であるかのようだ。沈黙する女性たちが発する短い言葉が、相手に対し与える破壊力を、ここでエリオットは描いている。また皮肉にも、リドゲイトはロールとの一件を通して、女性に対して同じ過ちを二度と犯すまいと決意したにもかかわらず、その決意がその後の彼の人生に反映されることはなかったのである。



### ドロシアとロザモンドの沈黙と身体接触

以上見てきたように、ロザモンドの美と沈黙を通じて、エリオットは声を持たない美しき客体という、男女の二項対立における女性の受動的立場を解体するだけではなく、逆説的にリドゲイトの欠陥をも明らかにする。しかしながら彼女は、同時に、沈黙がロザモンドの自己の変容においても重要な役割を果たすことを描いている。Amy Levin は、エリオットは沈黙を通して言語上のコミュニケーションによって登場人物同士が互いに自身の感情を伝えることが困難であることを示しながらも、沈黙やそれに近い瞬間を描いた場面において、多様な角度からの意味づけを行なっていると指摘する (23)。最後に、ドロシアによるリドゲイト夫妻の救済に向けた試みの中、彼女が二度目にロザモンドを訪問した場面において沈黙が果たす機能について、二人の言語外のコミュニケーション、とりわけロザモンドの視覚能力と彼女とドロシアの身体接触を通して検証する。

ロザモンドの精神的救済を実行しようと彼女を訪問した際、ウィルと彼女の恋人然とした場面を目撃してしまったドロシアは、二人に対し嫉妬と怒りの炎を燃え上がらせながらも、それを克服する。またロザモンドは、ドロシアに誤解を与えてしまったことに腹を立てたウィルから、厳しい言葉を浴びせられ、アイデンティティーの崩壊を経験する。こうした過程を経た後、二人の二度目の接見は果たされることになる。ドロシアを迎え入れた時のロザモンドの外見は、“Looking like the lovely ghost of herself” (793) と描かれ、自らのアイデンティティーを見失っていることが、実体としての存在を失った「亡霊」の直喩を通して示される。

ドロシアが入ってきてしばらくは、“a word of preface” (793) さえ交わされない。ロザモンドは最初、近付いてきた彼女に対し、彼女が優越感と敵意を持ってきたに違いないと身構える。しかしながら、次第にそれが自身の思い違いであったことを悟る。

Rosamond could not avoid meeting her glance, could not avoid putting her small hand into Dorothea's which clasped it with gentle motherliness; and immediately a doubt of her own prepossessions began to stir within her.

Rosamond's eye was quick for faces; she saw that Mrs Casaubon's face looked pale and changed since yesterday, yet gentle, and like the firm softness of her hand. (793)

二人の視線が合ってから、ドロシアの手がロザモンドの手を握りしめる。ここでまず、ロザモンドは早くも自分の先入観を疑い始める。ドロシアの手の感触はしっかりとして柔らかで、「優しき母性」と結びつけられる。その手がロザモンドの「小さな手」と触れ合うことで、二人は擬似的に母娘になぞらえられる。ドロシアとは違ってロザモンドには母親がいるものの、“The tinge of unpretentious, inoffensive vulgarity in Mrs Vincy gave more effect to Rosamond's refinement, which was beyond what Lydgate had expected” (158) と説明されるように、ヴィンシー夫人はロザモンドとは似ても似つかず、また実母とロザモンドの関係について、踏み込んで描かれてはいない。エリオットは、ドロシアとロザモンドを母娘に喩えることによって、実際の血縁を超えた女性同士の強い結びつきを示唆するとともに、ロザモンドを救済するドロシアの「母」のような美德を強調している。

また、身体を通じた感覚だけではなく、ここではロザモンドの視覚能力が発揮されている。以前にもロザモンドは、ウィルと一緒に歌を歌っていたところへドロシアが訪ねてきたので、彼女を観察する機会があった。しかしこの時は、“To Rosamond she was one of those county divinities not mixing with Middlemarch mortality, whose slightest marks of manner or appearance were worthy of her study” (432) とあるように、ロザモンドが「詳細に観察」しているのは、ドロシアの「振る舞いや外見」といった表面的な要素である。更に“worthy of”という言葉によって、ドロシアが観察に値する人物かどうかを、ロザモンドが優越性をもって判断しているかのような効果が生まれていた。しかし今は、ドロシアの顔の変化と穏やかさに続けて、彼女の心的状況も察知している。

... and in looking at Rosamond, she [Dorothea] suddenly found her heart swelling, and was unable to speak—all her effort was required to keep back

tears. She succeeded in that, and the emotion only passed over her face like the spirit of a sob; but it added to Rosamond's impression that Mrs Casaubon's state of mind must be something quite different from what she had imagined. (793)

ドロシアが涙を堪えたにもかかわらず、その感情が彼女の顔をかすめたことをロザモンドは見逃さない。それが、「啜り泣きの精霊」と喩えられることで、ロザモンドが、明示されないドロシアの内面の機微を捉えていることがわかる。

こうしてエリオットは、ドロシアとロザモンドが実際に対話へ入る前に、沈黙の中で行われる二人の視覚や感覚のやり取りが、言葉を超えた重要性を持っていることを示す。更に、ドロシアがウィルのことを暗に仄めかし、自身の悲しみに圧倒される時、二人は無言のうちに感情を交わし合う。

The waves of her [Dorothea's] own sorrow, from out of which she was struggling to save another, rushed over Dorothea with conquering force. She stopped in speechless agitation, not crying, but feeling as if she were being inwardly grappled. Her face had become of a deathlier paleness, her lips trembled, and she pressed her hands helplessly on the hands that lay under them.

Rosamond, taken hold of by an emotion stronger than her own—hurried along in a new movement which gave all things some new, awful, undefined aspect—could find no words, but involuntarily she put her lips to Dorothea's forehead which was very near her, and then for a minute the two women clasped each other as if they had been in a shipwreck. (797)

ここで注目すべきは、二人がこの時難破した船で手を取り合う「二人の女性」と喩えられていることである。この訪問において二人のやり取りが始まった当初は、ドロシアが「母」の立場からロザモンドを導く存在であるかのように描かれていた。しかしながらここでは、そうした関係性は取り払われ、新たな段階へと入っていくことが示唆される。ドロシアの手がロザモン

ドの手に押しつけられると、それに続けてロザモンドはドロシアの強い感情に捉えられる。ドロシアは、「言葉に出せない動揺」に苛まれ、また、ロザモンドも「言葉を見つけられない」状況にある。ところが今度はロザモンドの方から働きかけ、彼女はまるでドロシアの心を落ち着かせ、宥めるように、額に口付けをする。そしてその後ロザモンドの方から口火を切って、ウィルが愛しているのはドロシアであることを告げるにより、彼女を喜びへと導くきっかけを作るのだ。その時ロザモンドを突き動かしているものは、“a mysterious necessity” や “impulses” (798) である。概して場に相応しい言動を心がける「女優」であった彼女が、流れに身を任せて感情を吐露している。

このようにエリオットは、ロザモンドが他者の気持ちを押し量り、他者のために真実を明らかにしようとする自己の変容を遂げた瞬間を、対話に先立つ沈黙の中に描くのだ。その後、リドゲイトが入ってきて二人の会話は中断する。

*She [Dorothea] put out her hand to Rosamond, and they said an earnest, quiet good-bye without kiss or other show of effusion: there had been between them too much serious emotion for them to use the signs of it superficially. (799)*

二人はただ、別れの挨拶を熱を込めながらも静かに交わすこと以外は、言葉はおろか、仕草を通してさえ、二人の感情を露にしようとはしない。しかし確かに、二人は共通して厳かな感情を胸に秘めていたことが説明されている。

エリオットが、無言のうちに交わされる女性同士のやり取りの有用性を重視していることは、改めてリドゲイトとロザモンドのやり取りと比較してみるとよくわかる。以下は、ロザモンドがウィルの言葉に衝撃を受けた後で、リドゲイトがロザモンドの心境を押し量る場面である。

*Clinging to him she fell into hysterical sobbings and cries, and for the next hour he did nothing but soothe and tend her. He imagined that Dorothea had been to*

see her, and that all this effect on her nervous system, which evidently involved some new turning towards himself, was due to the excitement of the new impressions which that visit had raised. (780)

リドゲイトは確かに妻の変化を感じ取ってはいるものの、嗚咽する彼女を見て、その原因となるものはドロシアから受けた感銘であると想像し、妻が衝撃に打ちのめされているとは思わない。ロザモンドと別れた後、ドロシアは、玄關まで彼女を見送るリドゲイトに対してロザモンドについて話題にすることはない。またロザモンドも、リドゲイトの問いかけに対し、“I think she must be better than any one, . . . and she is very beautiful. If you go to talk to her so often, you will be more discontented with me than ever!” (800) とドロシアの印象を語るものの、具体的にどのようなやり取りがあったのかは明らかにはしない。ロザモンドが夫に対して僅かな気遣いの言葉と仕草を見せた後、語り手がリドゲイトの立場から、“He had chosen this fragile creature, and had taken the burthen of her life upon his arms” (800) と説明するように、彼にとってロザモンドはなお“the old despised shelter” (800) に戻ってきた「か弱い人」なのであり、彼女が経験した自己の変化を知ることはないのである。

もちろん、例えば、“With her [Dorothea’s] usual tendency to over-estimate the good in others, she felt a great outgoing of her heart towards Rosamond for the generous effort which had redeemed her from suffering, not counting that the effort was a reflex of her own energy” (798) とあるように、女性同士が、お互いのことを完璧に理解しうることを描いている訳ではない。しかしながら少なくともエリオットは、ドロシアとロザモンドが対話を通してだけでなく、沈黙のうちに行われる観察や、身体接触によって、夫婦間においては実現されなかった結びつきと自己の変容が達成されることを示すのである。

### 終わりに

ロザモンドは、とりわけ結婚前には、自身の感情を露にすることはなく、常に自分の置かれた状況に応じて振る舞う女優であり、その美しさとその発話行為が完璧に結合した存在として描かれている。結婚後彼女は、なおその

肉体の美しさでリドゲイトを魅了し続け、更に今度はそれが「沈黙」と結びつくことにより、夫に対して従順であることから巧みに逃れようとする。また、一見男性から見られる存在として描かれているようでありながら、彼女自身が他者の細かな言動を見逃さない観察者でもある。エリオットは、一見ロザモンドの欠陥として捉えられがちな美と沈黙によって、逆説的にリドゲイトの欠陥をも示しており、女性を下位とする男女の二項対立ではなく、より複雑な関係性を描こうとしていることが明らかになる。またリドゲイトとのやり取りにおけるロザモンドの沈黙が、男女の緊張状態を描いていたのとは違い、エリオットは彼女のドロシアとの関わりを通して女性同士の交流における沈黙の持つ肯定的な力を示している。ドロシアの表情や振る舞いから、ロザモンドが彼女の精神状態を察知するだけではなく、二人の身体が触れ合うことにより、対話を通してだけではなく、沈黙の瞬間にも感情の交流が生まれる。ドロシアの引き立て役として捉えられがちなロザモンドを、沈黙の観点から考察し直すと、彼女もまた重要な自己の変容を遂げていることがわかる。同時に、エリオットが、対話だけでは成し得ないミドルマーチ社会における人間関係の修復と、新たな関係構築において、沈黙を重要な手段として扱っていることが明らかになった。

## 注

- 1 Andrew Dowling は、『ミドルマーチ』における沈黙について、リドゲイトがロザモンドが沈黙の中に捉え難い頑固さを秘めていることに恐怖を感じることに、ドロシアがカソーボンとの結婚生活において、「恐怖にとらわれてあらゆるエネルギーがせき止められてしまうこと」に類似性を見出している。カソーボン夫婦とリドゲイト夫婦においては、沈黙を通して「性格の不一致」による抑圧が存在することが示されている。ヴィクトリア朝中期における法律の場での離婚事由としては、深刻なものと扱われることはなかったものの、ドロシアとリドゲイトが経験するパートナーとの「性格の不一致」が、結婚においてコミュニケーションが重要であることを同時代の読者たちに気づかせたとダウリングは論じている (330-31)。
- 2 沈黙についての社会言語学的な分析を行なった Deborah Tannen は、「沈黙とは

間接性が究極的に表現されたものである。間接性が、あることを言っているとしても他のことを意味しているのだとすれば、沈黙は、何も言わないけれど何かを意味しているということになりうる」と述べている (qtd. in Laurence 43)。

- 3 Russell M. Goldfarb は、ロザモンドの「意志の強さ」を論拠として、彼女について肯定的な論を展開する。また、Rebecca N. Mitchell は、Charlotte Brontë の *Jane Eyre* と、『ミドルマーチ』における主体性の問題に着目し、両作品に登場するロザモンドをめぐるプロットを通じて、登場人物がいかにか自己認識に至るのかについて考察している。ミッチェルによると、『ミドルマーチ』における登場人物達は、他者と自己との根本的な違い及び他者を知ることの困難さを認識することにおいて、『ジェーン・エア』に描かれる独善的な自己認識から発展を遂げているとする。ロザモンドもまた、ドロシアとの交流を通して、自己に閉じこもることなく他者の精神領域を知ることによって、寛大さを身につけたとして、ミッチェルは、ロザモンドに関して肯定的な見方を提示している (324)。

### Works Cited

- Dowling, Andrew. "‘The Other Side of Silence’: Matrimonial Conflict and the Divorce Court in George Eliot’s Fiction." *Nineteenth-Century Literature*, vol. 50, no. 3, 1995, pp. 322-36. JSTOR, [www.jstor.org/stable/2933672](http://www.jstor.org/stable/2933672).
- Eliot, George. *Middlemarch*. Edited by Rosemary Ashton, Penguin Books, 1994.
- Ferguson, Suzanne C. "Mme. Laure and Operative Irony in *Middlemarch*: A Structural Analogy." *Studies in English Literature, 1500-1900*, vol. 3, no. 4, 1963, pp. 509-16. JSTOR, [www.jstor.org/stable/449316](http://www.jstor.org/stable/449316).
- Freedman, Rita. *Beauty Bound*. Lexington Books, 1986.
- Goldfarb, Russell M. "Rosamond Vincy of *Middlemarch*." *CLA Journal*, vol. 30, no. 1, 1986, pp. 83-99. JSTOR, [www.jstor.org/stable/44321924](http://www.jstor.org/stable/44321924).
- Green, Laura. "George Eliot: Gender and Sexuality." *A Companion to George Eliot*, edited by Amanda Anderson and Harry E. Shaw, Wiley-Blackwell, 2013, pp. 385-99.
- Henley, Nancy M. *Body Politics: Power, Sex, and Nonverbal Communication*. Englewood Cliffs, 1977.

- Laurence, Patricia Ondek. *The Reading of Silence: Virginia Woolf in the English Tradition*. Stanford UP, 1991.
- Levin, Amy. "Silence, Gesture, and Meaning in *Middlemarch*." *George Eliot—George Henry Lewes Studies*, nos. 30/31, 1996, pp. 20-31. *JSTOR*, [www.jstor.org/stable/43580912](http://www.jstor.org/stable/43580912).
- Mitchell, Rebecca N. "The Rosamond Plots: Alterity and the Unknown in *Jane Eyre* and *Middlemarch*." *Nineteenth-Century Literature*, vol. 66, no. 3, 2011, pp. 307-27.
- Paxton, Nancy. *George Eliot and Herbert Spencer: Feminism, Evolutionism, and the Reconstruction of Gender*. Princeton UP, 1991.
- Woolf, Virginia. "George Eliot." *The Times Literary Supplement*, 20 Nov. 1919. Upenn Digital Library, <http://digital.library.upenn.edu/women/woolf/VW-Eliot.html>.
- フリードマン、リタ『美しさという神話』常田景子訳、新宿書房、1994.



## What Does Her Beauty “Say”? The Power of Silence in *Middlemarch*

Eri Satoh

In the ordeal of two married couples described in *Middlemarch*, the wives of each couple, Dorothea and Rosamond, are largely forced to be silent. From the gender perspective, silence seemingly represents the powerlessness of a woman compared to a man as the speaking subject. However, in Rosamond’s case, she sometimes evades Lydgate’s attempt to control her, even though she is generally silent. Moreover, she has the ability to perceive things around her as “a silent observer.” In this paper, I explore how Rosamond’s silence functions in her relationship with Lydgate and her final transformation. By considering Rosamond’s nature from the perspective of silence, I seek to clarify how Eliot portrays the complex relationship between husband and wife, in which silence does not simply represent the subordinate position of woman in the dualistic power relation of gender, but show the positive effect of silence on female characters.

First, I examine how Rosamond’s physical beauty and silence affect Lydgate in her married life. After the marriage, especially in their financial crisis, Lydgate takes the initiative in discussing the marital problems by insisting that he is the person to judge. Moreover, Lydgate feels disappointed that his wife lacks an inner life. However, Rosamond’s beauty still strongly attracts him and reminds him of their courtship. By remaining silent, Rosamond not only appeals to Lydgate’s vision and affection for her but also avoids agreeing with his instructions.

Second, I analyse how silence serves to enhance the mutual understanding of the characters and Rosamond’s development of self in the dialogue between Dorothea and Rosamond. Before they begin their conversation, Rosamond first divines Dorothea’s state of mind from her expression, which reduces their psychological distance. Their physical contact also serves to communicate their emotions, which makes Rosamond confess the truth concerning Will Ladislaw. I conclude that Eliot describes the potential power of silence, which finally contributes to the development of Rosamond’s self.

**Kathleen McCormack, *George Eliot in Society: Travels Abroad  
and Sundays at the Priory***

(The Ohio State University Press, 2013) xiii + 178 pp.

小林 英里

筆者 Kathleen McCormack によれば、George Eliot がイングランドで最も成功した小説家のうちのひとりして地位を確立した 1860 年代中盤以降、彼女と George Henry Lewes がともに過ごした時期は「みつつのシーズン」(2) に分けられるという。ひとつは冬の大半を過ごしたロンドンの邸宅プライオリーでの時期、ふたつめはヨーロッパを中心とした海外旅行や逗留の時期、そしてサリー州の賃貸住宅を借り上げ過ごした夏の時期である。一般にエリオットとルイスにかんする研究においては、ふたりが事実婚に踏み切ったことが「最重要の中核の出来事」(3) とみなされるため、こと伝記的事項に関心を寄せる研究者たちは、1860 年以前のエリオットの作家人生前半の時期にとくに着目してきたといえるだろう。こうした研究傾向とあいまって、エリオットとルイスの事実婚の生活は、いわゆる上品な (“respectable”) 社会からは疎外されていたという見かたが一般的であろう。エリオットを尊敬していたといわれている Virginia Woolf でさえも、エリオットのロンドンでの生活を「隠遁生活」(4) と評している。

こうした見解に対しマコーマックは、自身が参照したイェール大学の “the Beinecke Rare Book and Manuscript Library” に所蔵されているルイスの未出版の一次資料（日誌や手紙、それにエリオットとルイスが主催したサロンへの訪問客にかんする記録）からは、まったくもって異なった見方が引き出されると結論づけている。Middlemarch や Daniel Deronda などの後期のエリオット作品が生まれるにあたり、異なる階級の人々や多様な性的指向をもつ人々が集った国内の自宅サロンでの会話や、欧州で出会ったさまざまな出自をもつ人々との交流が果たした役割は、決して小さなものではなかったという。他方でサロンに集ったゲストのほうも、エリオットやルイスとの知的な会話がこのうえない刺激となり、ゲスト自身がそれまで携わってきたさまざまな

社会活動（執筆活動や音楽活動など）での活躍につながったという。本書が明らかにするのは、1860年代以降のエリオットとルイスの国内外での生活がいかに活気に満ちたものであり、また、いかに活発にホストとゲストの双方向の交渉がおこなわれていたのかという点である。

本書は6章の構成となっている。「イントロダクション」と題された第1章では、本書のおもだった出典情報が記載されている。ゲストのリストや旅行記を記したルイスの日誌のほかに、Gordon S. Haight、William Baker、Margaret HarrisそしてJudith Johnsonによって集められた多数の書簡について言及されており、こうした一次資料がイギリスでのサロンのようすや欧州のスパでの興味深い情報を提供してくれたとある。第2章以降では、第1章で言及されたルイスとエリオットの「海外への旅とプライオリーでの日曜日」（本書の副題）の詳細が記載される。第2章は“Travels Abroad: Taking the Waters”と題され、ドイツやスイスのスパでの滞在について書かれている。第3章は“Months of Sundays”とあり、ロンドンのSt. John’s Woodの屋敷プライオリーで開催された日曜日のサロンが扱われている。第4章は“Between *Middlemarch* and *Daniel Deronda*: Singers, Lovers, and Others”とタイトルされ、代表作の登場人物のモデルとなったと考えられる人々との交流のようすが描かれている。第5章は“The Salons, the Spas, and *Daniel Deronda*”と題され、前章と同様に同小説の登場人物の造形に影響をあたえた筆者が考える人々について分析がなされている。ここ第4章と第5章で特筆すべき点としてあげられるのが、サロンはエリオットの作品の「プロモーションの場」（63）であったと同時に、彼女がゲストや旅で出会った人々から影響を受けた場でもあり、さらには、エリオットと交流した人々のほうでも多大な影響や刺激を受けたということである。最終章は“John Cross and the Last Spa”とあり、ルイス亡きあとのエリオットのようすや、クロスとの「新婚旅行」（141）での新郎の「飛び降り」（141）を中心にして考察がおこなわれている。

本書の評価点のひとつは、従来はエリオット研究者や一般の読者がアクセスしづらかった貴重な資料を掘り起こして、広く一般に提供したことにあるだろう。このことによりエリオットの作品への理解が深まることは間違いな

い。さらにエリオットに対して伝記的なアプローチをとる研究者にとって新たな資料へのアクセスや新たな考察が可能となる。このことに加えて、本書で言及されているゲストたちが非常に多彩な人々であるため、本書を起点として研究が多方向へと延びていく可能性を有しているという指摘もできよう。

こうした新しい研究の新しい可能性を示す一例として挙げたいのは、Leslie Stephen (9) からヴァージニア・ウルフを経て、“the Cambridge Apostles”（「ケンブリッジ使徒会」）に至るまでの系譜で、とりわけ女子高等教育とセクシュアリティにかんする事柄についてのものである。レズリー・スティーヴンはプライオリーでの日曜日のサロンに参加し、エリオットに対して以下のようにコメントしている。「天候が悪くて客人の数が少ないときには、控えめな会話を盛りたてようとする女主人は、彼女を賛美してやまないわれわれにとって、この上なく魅力的だった」（8）。先述したように、ヴァージニア・ウルフも父親同様にエリオットの「賛美者」（4）であった。

女性の自立の条件を説いたウルフの *A Room of One's Own* (1929) は、もともとは Cambridge 大学のふたつの女子カレッジ（Newnham College および Girton College）においておこなわれた 1928 年の講演がもとになっている。これらのカレッジの創設がジョージ・エリオットと関連があることが本書では詳細に記述される。ニューナム・カレッジの設立を提唱した人々のうち、Henry Sidgwick、F. W. H. Myers、Anne Jemima Clough は、プライオリーの日曜サロンのゲストであった。クラフはニューナムの寮監を務めた人物である。他方、ガートン・カレッジの創設者は Emily Davies と Barbara Bodichon である。このうちボディションは熱心なプライオリーの常連客で、「1850 年代初頭からすでにエリオットと親交があった」（67）という。エリオットはガートン・カレッジ設立のために「金銭的に援助をおこない、適切なカリキュラムについての助言をおこなった」（67）とある。エリオットは 1877 年にカレッジを訪れており、このことは親友ボディションのためにエリオットが並々ならぬ親愛の情を示したことの証左であると同時に、女子高等教育の設立とその発展に対するエリオットの貢献を示すものである。

本書の第 4 章においては “Gay and Lesbian Guests: ‘Unknown Struggle of the

Soul”と題されたセクションがある。1960年代の性革命以前にエリオットの伝記を手がけたゴードン・S・ヘイトは、同性愛を「異常で背教的で自然に反するもの」(92)とみなして、プライオリーに集う同性のパートナーをもつゲストや長く独身を貫いているゲストについて言及しているが、彼の著作はかなりの資料的価値があることが本書では示唆されている。ヘイトの伝記に依拠しつつ、本書はこうした男性ゲスト数名の名前を挙げている。なかでも本書が重要視しているのは、プライオリーのゲストのひとりである F. W. H. マイヤーズをつうじて、数名の「ケンブリッジ使徒会」の会員がプライオリーでのサロンへ紹介されたことである。「ケンブリッジ使徒会」とは、1820年に12人のメンバーによって設立された大学内の一種の秘密クラブであり、経済学者 J. M. ケインズや哲学者 B. ラッセルなどの「ブルームズベリー・グループ」のメンバー（その多くは同性愛的な性的指向があった）や、第二次世界大戦時から冷戦期にかけてソ連のスパイとして暗躍した「ケンブリッジ・ファイブ」の G. バージェスや A. ブラントなどが会員であったことで知られている。プライオリーのゲストのマイヤーズ経由で、ジョージ・エリオットは1873年に大学の Trinity College の使徒会メンバーの部屋に招かれたそうである。自宅サロンをつうじてエリオットには、多様な価値観をもつひとつひとつと接する機会があったことがうかがわれる。

ヘイトは同性愛的な傾向をもつ女性ゲストについても言及している。彼が唯一「性的情熱をもってジョージ・エリオットを愛した女性」(93)と評したのは、Edith Simcox である。本書ではシムコックスの自伝を引用しつつ、ジョン・ウォルター・クロスの Eleanor と Mary の姉妹について言及がなされている。それによると、メアリーがエリオットに、エレノアがシムコックスに、好意を抱いていたという。ジョン・クロスとの問題含みの結婚のうち、エリオットはシムコックスを「避けていた」(94)ようであるが、そのときの夫妻についての情報をシムコックスはエレノアから得ていた。このように、レズリー・ステューヴンから「ケンブリッジ使徒会」に至るまでのジョージ・エリオットのプライオリーでのサロンにまつわる人間関係から指摘できることは、本書が、今日のゲイ・レズビアンを始めとするセクシュアリティをめぐる議論や、女子高等教育にかんする議論に寄与する可能

性を有しているということだ。

本書のもうひとつのテーマである「海外旅行」についてごく簡便に言及しよう。例えば、滞在したドイツのスパは *Daniel Deronda* の「創造の源」(80) になったと本書では書かれており、作品の登場人物のモデルとなったと考えられる人々との邂逅が詳細に記述されている。同小説冒頭でヒロインの Gwendolen Harleth がギャンブルに興ずる姿は、ドイツの Bad Homburg にて「Lord Byron の又姪の Geraldine Leigh がルーレットに夢中になっている姿と重なる」(113) と筆者は分析している。また、Mirah Lapidoth のモデルとなった女性についての言及 (89) もある。

本書は、ここで言及された人物名や逸話を起点にするならば、ジョージ・エリオット研究が放射線状に無限に広がっていく可能性を有している。エリオット研究における定番の批評軸（例えば階級制度やジェンダー批評やユダヤ人表象などの人種にかんする批評軸）だけでなく、前述したようなセクシュアリティといった現代批評の問題系や、サロンのホストとゲストとの活発な双方向の交渉における作品のプロモーションや流通や消費の問題といった社会的資本の問題にも目配りがなされている。まさにエリオット研究に新たな視点をあたえる良書である。

## Oliver Lovesey, *Postcolonial George Eliot*

(Palgrave Macmillan, 2017) vii + 310 pp.

濱 奈々恵

George Eliot の人気は……ない。Rebecca Mead が *My Life in Middlemarch* (2014) を書いて賞賛されようと、映画 *Trainspotting* の監督 Irvine Welsh が影響を受けた作家の一人に Eliot の名を出そうと (*The Guardian*, April 3, 2016)、Eliot の人気はヴィクトリア朝期に活躍した他作家の人気に及ばない。彼女が新しい 10 ポンド紙幣の候補に挙がったとは考えにくく、*Pride and Prejudice and Zombies* (2009) や *Jane Eyre* (2012) に次ぐ翻案小説が生まれるにはまだ時間がかかりそうだ。J. Hills Miller や Terry Eagleton のような知識人に好まれても、Eliot 研究の意義をわざわざ説明したり、大量の注釈をつけたりすることで、研究者と一般読者の間に壁ができて不思議ではない。

本書の執筆が始まった頃、中東、北アフリカは独裁政治への反発に端を発する民主化運動、いわゆる「アラブの春」が終焉に近づきつつあった。政権交代の混乱や内戦、難民の数は増える一方で、現地の様子はインターネットや SNS でも拡散し続けた。そもそもなぜこのような悲劇的な混乱が生じたのか。その原因はヴィクトリア朝期に生まれた東洋と西洋の誤解、果ては 19 世紀のヨーロッパ帝国主義にある。この気づきが本書を執筆する原動力になっている。

著者の Oliver Lovesey は British Columbia 大学の教授(出版当時は准教授)で、ヴィクトリア朝や Eliot 研究で数々の業績がある。最初の著書は *The Clerical Character in George Eliot's Fiction* (ELS, 1991) で、これは McMaster 大学に提出された博士論文をまとめたものである。本稿で取り上げる *Postcolonial George Eliot* は 4 冊目の研究書で、すべての論文は本書のために執筆されている。他にも、*The Mill on the Floss* (Broadview, 2007) や *Popular Music and the Postcolonial* (Routledge, 2019) で編者を務め、アフリカ文学研究、主にケニア人作家 Ngũgĩ wa Thiong'o (1938-) の研究も行っている。

*Postcolonial George Eliot* は Introduction と Conclusion を含む全 5 章からなり、第 2 章から第 4 章で具体的な議論が行われる。ポストコロニアル理論で Eliot を研究する場合、“Brother Jacob” (1864)、*Felix Holt, the Radical* (1866)、*Daniel Deronda* (1876) をメインテキストにすることが多い。ところが Lovesey は *Scenes of Clerical Life* (1858)、*Adam Bede* (1859)、*Middlemarch* (1871-72) といった植民地との直接的な関係が見えにくい作品を選んでおり、新しい解釈を提示しようという積極性が感じられる。以下、各章のタイトルとその概要をまとめていく。

### Chapter 1. Introduction: George Eliot and the Victorian Postcolonial

Eliot が作家として活躍していた頃、大英帝国は領土拡大を続けている最中にあった。彼女は姉や George Henry Lewes (1817-78) の息子たちの植民地行きを支持しながら、その一方で、自分たちは植民地を作る側の人間 (colonizing people) であると自覚し、宗主国の側にいながらも、他者への理解が足りない英国の島国根性と帝国主義に付随する暴力に批判の矛先を向けていた。つまり、Eliot は自国の「負」の部分認識していたわけだが、だからといって「彼女の態度に問題がないとは言い難い」(3)。

著者は Edward Said (1935-2003) の “travelling theory” (思想や理論は人から人へ、場所から場所へ、時代から時代へ受け継がれるうちに変化するという考え) に基づき、時代や地域を限定しない研究を目指す。「モダン、ポストモダンからコスモポリタン、トランスナショナル、ゴシック、そしておそらくポストコロニアルの視点からそれぞれの時代の George Eliot を産み出せる」(2) と主張する通り、Eliot 作品には絶えず新しい解釈を提供する可能性がある。著者は以降の章で、①国内、地域内での植民地主義や帝国主義の表象、②東洋と西洋の接点、③異民族の移住、追放、故郷模索、④イスラムの未来に対するヴィクトリア朝期の曖昧な態度、⑤国際的な教育やポストコロニアル文学における Eliot の位置を考察していく。



## Chapter 2. Decolonizing Victorian Anthropology

(*Scenes of Clerical Life* and *Adam Bede*)

Eliot は Lewes を通して人類学や自然史に精通していき、小説と人類学の組み合わせ方を模索した。ただし、19 世紀の人類学者は“armchair anthropologists” (52) と揶揄されるように、現地へ行かずに調査報告することもあった。20 世紀に入ってから、人類学者 Bronislaw Malinowski (1884-1942) はこの学問姿勢を批判し、参与観察者 (participant observer) の視点を重視した。以降、現地の生活や活動に加わってその文化を学びながら、そこで共有されている価値観を明らかにする調査技法が求められるようになる。Lovesey はこの技法が早くも *Scenes of Clerical Life* や *Adam Bede* で使用されていると述べ、Eliot 作品の語りと人類学者の報告手法との類似点を指摘する。

Eliot 作品では田舎にいる人と外からくる人との間に必ず価値観の違いがあり、両者は容易に理解し合えない。この対立は現地人と無遠慮に立ち入る入植者との対立構造と同質のものであり、植民地そのものを描かなくとも植民地主義に通じるイデオロギーを読み解くことができる。ただし、Eliot は田舎を野蛮で原始的な場所として見立てることはなく、外部から内部に変化がもたらされることも必要としない。むしろ、社会の変革に必要なのは内部、特に社会の下部層にいる人たちだという主張を貫き、彼らを一方的な価値の押しつけから救う。Lovesey はこれを脱植民地化のナラティブとして読む。

## Chapter 3. George Eliot and Victorian Islamophobia

(*Felix Holt's Colonial Project*)

19 世紀のイギリスで東洋やイスラムは顕在化していたはずだが、なぜか Eliot 作品ではその存在が消えている。Eliot が経験や知識に基づいて執筆する作家だったのは間違いない。しかし、Lovesey は Eliot が人類学者でもあった Eugène Bodichon (1810-85) やその妻 Barbara (1827-91) と親しく、夫妻の滞在先 (アルジェリア) からイスラムのことを記した手紙を受け取っていたこと、また、Lewes が編集を務めた *Fortnightly Review* に東洋やイスラムに関する議論が掲載されていたことを挙げて、Eliot が当時のイスラム恐怖

症 (Islamophobia) に陥っていた痕跡を読み取る。Eliot 作品では主人公が植民地や東洋に旅立つ展開はあるが、その様子は描かれていない。Lovesey はこれを読者の想像を掻き立てる装置としてではなく、むしろ意図的な沈黙と読み取る。

またここでは、*Felix Holt, the Radical* に登場する Harold Transome の亡き妻に関して、作中では単に Harold に買われた「女奴隷」として登場する彼女の出自が考察される。Lovesey は作品の時代設定を考慮に入れて、Harold の妻はギリシャからトルコに逃れたイスラム系の奴隷であること (129)、当時のイギリス人女性に比べて金銭的な自由や権利が保証されていたこと (133)、子を産めば奴隷としての社会的な格が上がること (141) などを挙げ、従来女奴隷像に修正を加えていく。

#### Chapter 4. *Middlemarch's Colonial Imaginary*

*Middlemarch* は副題の “A Study of Provincial Life” が意味する通り、田舎生活の描写とそこでの人生模様が主たるテーマである。だがこの田舎生活にも植民地主義のテーマを読み取ることができる。たとえば、Casaubon の研究 (“The Key to All Mythologies”) はその対象をギリシャとローマに絞りながらも、ヘブライ語とエジプト語の文献、オスマン帝国とペルシャも含み、異質なものの相似 (analogy) と相同 (homology) を明らかにしながら、全てのものが単一の原点に集約できるという植民地主義的な幻想と結びついている。しかも、彼の研究拠点はイングランドの田舎にあり、Lovesey は Casaubon を西洋中心主義の “armchair orientalist” (185) と形容する。

外からくる Will Ladislaw は入植者 (a colony) のように見えるが、Lovesey はこれを否定し、また Dorothea と Ladislaw のロマンスは植民地主義のアレゴリーでもない (204) と述べる。むしろ、Dorothea が建設を目指すユートピア的な集団住宅 (colony) は彼女によって形成される想像の共同体 (imagined communities) であり、この植民地化計画を成功させるために、彼女は周囲の「他者」を巻き込んでいくわけである。結局、Ladislaw は遠い他国 (Far West) に行く計画を諦めて、Dorothea と二人だけのコロニーにとどまっているため、Lovesey はこの物語を Dorothea のナショナル・ナラティブ

として読み解く。

### Chapter 5. Conclusion: The Leavis Tradition, Educational Assessment, and the Postcolonial Library

第1章から第4章までは Eliot 作品の中における植民地主義や帝国主義の表象を確認してきたが、第5章では旧植民地で Eliot がどのように読まれ、受け継がれているのかが述べられる。ここで中心になるのは F. R. Leavis (1895-1978) の功績、特に 1930 年代以降の英文学界における彼の影響である。Leavis が 1931 年に Downing College の学科長になったことで、教育内容や英文学研究には Leavis の影響が色濃く残る。彼の教えを受けた学生の中には、英連邦文学研究科を立ち上げて留学生を受け入れる者、セイロン、南アフリカ、オーストラリアなどで教鞭をとる者が現れ、また彼が中心となって作られた雑誌 *Scrutiny* (1931 年創刊) が Cambridge 大学に所属するインドやパキスタンのエリート層に好んで読まれるなど、Leavis 帝国が広がる環境は整っていた。

Cambridge 大学が開発した試験 (Cambridge Local Examination) には英文学に関する設問があり、1918 年に *Romola* (1863) の作者は誰かを問う問題で Eliot は初めて登場する。Eliot は 20 世紀において英国の象徴、あるいはナショナリズムの片棒を担ぐ人物として利用されていたというわけである。Lovesey はこのような Leavis や Eliot の存在がチラつく教育を受けた人たちのその後を追い、最後に Eliot の翻案小説を紹介する。

以上が本書の概要である。Eliot と帝国主義を結びつける研究として最も顕著なものは、Nancy Henry の *George Eliot and the British Empire* (2001) であるが、Lovesey は「彼女の研究は時に伝記やテキスト分析を省き、ポストコロニアル研究を歴史とは無関係なものとして扱うことがある」(5) と述べている。そのため、Lovesey は常に Eliot 作品を歴史的コンテキストや地政学に照らし合わせて検証し、作品を単なる創作物として済ませない姿勢を貫いている。特に、Harold の妻の素性を歴史的な側面から探った第3章にその姿勢が表れており、Alicia Carroll が *Dark Smiles: Race and Desire in George*

*Eliot* (2003) で行ったフェミニズム的な議論とはまた異なる新たな視点を提示している。加えて、*Eliot* 作品をポストコロニアリズムの視点で読むのではなく、旧植民地における *Eliot* 作品の受容を考察した Conclusion は示唆に富み、旧植民地の作家によって紡がれる *Eliot* の翻案小説は今後の *Eliot* 研究への新たな道しるべとして意義深い。その一方で、*Lovesey* の視線の先にあるのが常に田舎に入り込む植民地主義、帝国主義の表象であったこと、その表象に作品ごとのつながりが見えなかった点にもの足りなさを感じた。*Eliot* の作家活動の時期と帝国主義の時期とが重なることを主張するのであれば、*Scenes of Clerical Life* から *Middlemarch* あるいは *Daniel Deronda* までの大英帝国の描かれ方の違いを検証する必要もあったのではないかと考える。

最後に、本書の表紙について述べておきたい。本書の表紙は全体的にオレンジの色味を帯びたもので、表紙の中央よりもやや下の部分から背表紙にかけて船のマストと波が描かれている。夕日に照り輝く海原の描写はとても美しく、一見すると秋の夕暮れ時の海を思わせる。だが、実際の描写はこの印象と大きく異なる。この絵を描いたのは、J. M. W. Turner (1775-1851) で、ここで描かれている船は「奴隷船」である。この象徴的な表紙を選んだ理由を本書の著者にメールでたずねたところ、以下のような返事をいただいた。ご本人の承諾を得て、引用する。

The cover is a detail from Turner's "Slavers Throwing Overboard the Dead and Dying--Typhoon Coming On," which represents a slave ship discarding its "cargo" in mid-ocean. I chose it because it is Victorian and represents a very beautiful, if chaotic, surface and hides the cruel reality taking place. It perhaps represents, too, Eliot's work's apparent distance from colonial realities that are apparent in various ways as the book maintains. Using it for the cover was a way of suggesting that Eliot's work's "colonial" connection wasn't merely the occasional reference to characters going "overseas" to the colonies to re-make themselves or Eliot's own South African investments. We look at the painting and particularly the detail and we don't see the lives being lost. It also suggests Turner's later approach to something resembling abstract expressionism.

多くの人は Turner の絵を見た時、夕日を思わせる空の色や海に浮かぶ船に目を向け、船から放り出されて取り残された人に目を向けることがないだろう。Lovesey が憂慮するのはこの点である。私たちは見逃されがちな「残酷な現実」にどれくらい目を向けられているだろうか。これは Turner の絵でいう「失われゆく命」(the lives being lost) だけではなく、Eliot が書かなかった植民地での様子やイスラムの姿にもいえることである。私たちは時おり、自分が選んだ作家を過剰に擁護し、作家と距離を取って俯瞰的に見ることを忘れがちになる。だがそれはポストコロニアリズムの視点に立脚した研究では望ましい態度とは言えない。この点、Lovesey は当時の文献や現代の研究書を広範囲に参照し、当時の視点、現代の視点から Eliot その人に対してではなく、Eliot が書いたもの、書かなかったものに対して冷静な分析を行っている。Turner の絵とそれを表紙に選んだ Lovesey の研究姿勢から、研究者としての視点の定め方を改めて考えさせられた。

木下未果子著 『共鳴するジョージ・エリオットと  
ヴァージニア・ウルフ——「私」から「私たち」へ』  
(彩流社、2018年) 294 + viii 頁

藤原 知予

ヴィクトリア朝英国を代表するリアリズム作家であるジョージ・エリオットと20世紀のモダニズム作家であるヴァージニア・ウルフは、一見対照的な作家であるが、実は両者には共通点多々あり、ウルフはエリオットの文学的精神的伝統を継承している。この見解は、目新しいものではない。しかし、エリオットとウルフが共有する芸術的関心事の中から「個と集合体」というテーマに焦点を当て、さらに彼女たちが作品中でそのテーマをいかに扱っているかを、20世紀米国で活躍したユダヤ人女性政治哲学者ハンナ・アーレントの議論を援用して分析した点において、本研究は全く新しいものであると言える。ウルフがエリオットを読んでいたのは周知の事実であるが、ウルフと同時代に生きたアーレントとは、生存中面識はない。ドイツで生まれ、師であり愛人でもあったマルティン・ハイデッガーの影響で哲学に傾倒し、フッサールやヤスパースにも師事したアーレントは、ナチス政権によるユダヤ人迫害と第二次世界大戦を経験した後、米国へ亡命し、数々の名門大学で哲学者としての地位を築き上げた。アーレントがエリオットとウルフを読んでいた事実も、現時点では確認されていない。では木下氏（以下、著者と記す）は、なぜアーレントを用いたのか。それは、この三人の女性著述家たちが持っていた問題意識と、それに対する応答の思考が驚くほど近似していることを、彼女が発見したからである。アーレントの議論を援用することによって、エリオットとウルフが共有する「個と集合体」という問題意識に対する両作家の取り組みを明らかにした本書は、影響関係に基づく比較文学研究とは全く別の方法で、エリオットからウルフへと、文学者としての精神的伝統が継承されていることを改めて納得させてくれるものである。

本書は大きく分けて三部より成り、各部においてエリオットとウルフの作品が一つずつ比較分析される。分析にあたり、著者はアーレントの思想の

中でも特に次の五つの概念に焦点を当てる。①「公的 (“public”）」(41)、②「私的 (“private”）」(43)、③「物語ること (“story-telling”）」と「芸術作品 (“art”）」として「物化 (“materialization”）」することの意味 (47-49)、④個人に画一性を強いる危険なものとしての「社会 (“society”）」(50)、⑤「親密性の領域 (“the sphere of intimacy”）」(52) についての議論である。これらの議論を、各章において複合的に補助線として用いながら、エリオットとウルフがいかにか「個」と「集合体」の問題を作品に描き出しているかを読み解いている。以下に各章の論考を紹介していく。

### 第一部「社会通念と自己の現れ」

第一部では、『アダム・ビード』(以下『アダム』と略記)と『灯台へ』が扱われる。アーレントは、他者に「見られ、聞かれ」ることによって、自己を外側の世界に「現す」ことが、人間らしい生き方であると説いている。さらに、自己を「現す」ために自分の思考や感情を「物語」ったり、芸術作品として「物化」することによって、それらが他者と共有されて、複数の視点から捉えられる。主観的な思考や感情が、客観的に見られ聞かれることによってはじめてリアルなものになると説く (61)。第一部では、両作品において、登場人物たちがどのような方法で自己を「現して」いるかが分析されている。

第一章「聞くことと、物語ること——『アダム・ビード』」では、ヘティの嬰兒殺しはヘイスロープというコミュニティの抱えていた問題が原因であるということ、そしてその問題が、ダイナが持つ他者の「物語り」を引き出す力によって改善されているという読みが展開される。ヘイスロープは、著者によると、アーレントの論じる危険な社会である。アーレントの考える社会とは、個人の個性をなくし、単一の意見や利害を同じくするよう強要し、まるで「巨大な家族の一員であるようふるまうことを要求する」(51) 画一主義の性質を持つものだ。『アダム』の時代背景である 18 世紀末は、男は公的領域、女は私的領域と、男女の活動の場が明確に二分化されていた時代だった。『アダム』に描かれる男女は、男は公的領域で、女は私的領域でいかに生きるべきか、という価値観にそれぞれ縛られている。男たちは公的領

域において社会が求める画一的な価値観に基づいて行動し、自身が本当にすべきことを見落とし、ヘティの悲劇の引き金を引く。また、女は家庭をはじめとする私的領域で生きるべきだという社会的価値観も、ダイナを除く、私的領域のみで活動する女たちの狭小な思考と言動を生み出し、ヘティの悲劇の一因となっていることが分析される。「私的空間」に閉じこもり、自分のことを語らず、他者の言葉も受け入れないヘティは幻想の中に生き、嬰兒殺しに至った。しかし著者がその分析に一番力点を置いたダイナのみが、公的私的領域を往来し、社会の抑圧から自由である。ダイナは共感をもとに、ヘティをはじめとして他者の「物語り」を引き出す力を持ち、他者を救っていく。ヘイスロープの私的領域における孤独が生み出した問題が、ダイナの「物語り」を導き出す力によって改善されるという読みが、アーレントの理論をもとに展開される。

多くの議論を呼んできた『アダム』の結末部について著者は、ダイナの結婚から、社会的後退ではなく前進のイメージを読み取っている。ダイナは家庭という私的領域へ逆戻りしたわけではなく、彼女の強みである他者の物語を聞く力、引き出す力を私的領域においても発揮させていくであろうことが期待できると論じられる。男女の活動の場が公的、私的領域に明確に二分されていた時代において、有能な女性たちが現実的に活躍できる場としての私的領域への期待を、エリオットがダイナを通して描いていると著者は結論づける。この結論からは、ダイナとアダムの築く家庭という私的領域が、アーレントの定義のように、他者の視線や自分自身との対話のない孤独な空間ではなく、家族や親しい者同士と交流することで、自身の思考や感情を共有できる空間になるであろうという著者の期待が感じられる。評者には、アダムとダイナが築く新しい空間に、後の章で著者が取り上げる「親密性の領域」の萌芽が見られるように思えた。このように、ダイナの結婚をめぐる結末部の肯定的解釈が、また新たな視点から行われている点においても、意義深い論考である。

第二章「私のヴィジョン」への道のり——『灯台へ』において著者は、作品をラムジー家に集う女性たちの自己認識とその表出を探る物語として捉え、特にリリー・ブリスコーに光を当てて、アーレントの「物化」



の概念の意義を立証する例として分析する。ヴィクトリア朝の価値観の影響を受けて生きるラムジー夫人と娘たちや、それに反発するミンタなどさまざまな価値観をもつ女性たちとの関わりの中で、リリーは揺れ、葛藤しながら自分らしい生き方を模索する。小説の前半では、敬愛するラムジー夫人の影響を大きく受け、ヴィクトリア朝の価値観の重圧に屈しそうになっていたリリーが、10年後が描かれる小説の後半では、自分に影響を及ぼす人たちから適度な距離をとり、他者や物事の全体像を、多角的に客観視することができるようになったという読みが展開される。リリーが自身との内的対話の中で得た靈感を絵に表現したという設定を、著者はアーレントの「独居」と「物化」の議論を用いて分析する。人間の思考や経験が「物化」という過程を通して他者に伝えられ、共有されることによって、それに対する複数の見解が生まれ、リアルなものになるというアーレントの議論を援用し、リリーが過去を切り捨てることなく自分らしい生き方のヴィジョンを得たということが絵の完成に暗示されている設定に、ウルフの芸術への期待を読み取っている。

## 第二部「新領域の創出」

第二部では、『ロモラ』と『オーランドー』が扱われる。主人公が、公的／私的領域にその活動の場を限定せず、両領域を往還した結果、アーレントの概念である「新領域」を創出するという解釈のもと、両作品において、その領域がいかなる意味を持つかということが分析される。

第三章「公／私の領域を超えて——『ロモラ』」では、主要な男性登場人物たちの死を経験するロモラが公私領域を往還し、その経験をもとに構築した新領域に、エリオットの人間性の宗教的特質が見られることが主張される。前部に引き続きアーレントの「公的／私的領域」の議論が用いられ、作品前半のロモラの様子から、私的領域の閉そく性が人間を孤立させ、卑屈にすることが確認される。さらに、ティート、サヴォナローラ、二人の老人バルドとバルダッサーレの死という結末が、人間を利己愛や虚栄心で満たす公共領域の危険性の行く末を暗示するものだと指摘される。ロモラは公私領域間を移動しながら、人間の生き様の多様性を認め、その差異を受容する。こ

の学びを生かし、ブリージダやテッサたちと共に暮らす新しい生活の場は、アーレントが公私の領域の外にあると位置づけた「親密性の領域」(148)だと見ることができるという。しかしこの領域を、社会的な拘束からの逃避の場として否定的にとらえるアーレントとは異なり、著者は、社会に居場所の見つけにくい弱者が、安心して自分の意志を表現することのできる場として肯定的にとらえている。同胞愛にもとづいて拓かれたロモラの親密性の領域に、著者はエリオットの人間性の宗教の一端を読み取っている。

第四章「帰属の曖昧性——『オーランドー』」では、公私の領域の往還を経て主人公オーランドーが獲得した新領域における、多様性に富む生き方と視点が分析されている。400年という年月をかけて英国内外の公私領域間を、時に性別を転換しながら主人公が行き来するという、極めて特異な設定を持つ本作において、オーランドーの行きついた領域は、ロモラの構築した「親密性の領域」に近似していること、さらにオーランドーの詩の完成は、アーレントの「物化」のプロセスをたどり、第二章で分析されたりリー・ブリスコーの絵の完成と重なる意味を持つことが主張される。前章までは、男性が公的領域、女性が私的領域に活動が限定されていることから生じる問題点が数多く指摘されてきたが、本章では、男女の生を両方経験するオーランドーが、公私どちらの領域に対しても批判眼を持ち、どちらに属するでもない曖昧な立場をとることが注目される。この曖昧さによってオーランドーは、既存の公的領域と私的領域のどちらかではなく、「新しい領域」を自ら拓くことができたと解釈される。これは前章でロモラが構築したと著者が述べる「親密性の領域」と近似し、「性別、階層など、帰属の曖昧さが保たれたまま、自己をのびやかに表出できる領域」(175)である。社会が個人に押し付ける画一主義に対する反発から生まれ、それから解放されて自由に発展できる教育の場という意味において、アーレントとユルゲン・ハーバーマスの定義する「親密性の領域」と通じることを主張する。さらに、この新領域において、女性オーランドーが詩作を完成させるという設定に、男性作家と異なり、社会的基盤や伝統を持たない女性作家による芸術に対するウルフの期待を読み取っている。

### 第三部「分散した「個」から「共通世界」構築へ」

第三部では、『ダニエル・デロンダ』（以下『ダニエル』と略記）と『幕間』が扱われる。登場人物たちが「個」の自律を守りつつも「集合体」の一員として他者と融合していく過程を、エリオットとウルフがどのように描いているかが分析される。

第五章「居場所の探求——『ダニエル・デロンダ』」では、主要な登場人物たちがたどる上記の過程が、アーレントの論じる「物語る」行為を通して「孤独」から「独居」の状態へと昇格するプロセスを経て、実現へ向かっていくことが証明される。本章では、著者はアーレントの議論をもとにしたが、デロンダの母方の祖父ダニエル・カリシの言葉「人間が力と富を得るか否かは『分離 (separateness)』と『交流 (communication)』のバランスのとり方次第だ」（『ダニエル』第8巻第60章）の中にある、「分離」と「交流」の二つをキータームに据えて、分析を進めている。グウェンドレンとデロンダの関係を、苦悩する者とそのメンターとして捉えるのではなく、自分の居場所に違和感を持ち、苦悩する者同士として見る著者によると、アーレントの「孤独」の状態にあった二人は、様々な出会いや経験を経て、自分自身と対話する「独居」の状態を獲得し、自らの心の声を他者に聞いてもらいたいという「物語り」願望を持つようになったという。「物語る」ことで自身の経験や思考を他者と共有し、自らのルーツを共有する人たちとの間に存在する、「時間的空間的境界を越えた共通の世界」（186）を認めることで、グウェンドレンとデロンダは精神の亡命状態から解放される。個人が、自分が歴史の紡いできた世界の一部を成すことを認識しつつ、それに飲み込まれることなく自分の個我を生かして、新たな歴史を刻む営みに加わるためには、分離と交流のバランスが必要であると論じられる。分離と交流の適切なバランスの確保によって、狭量な民族主義に偏らない理解と受容と共存への道が開けることを、ユダヤのプロットを通して描き出したエリオットの試みが明らかにされる論考となっている。

第六章「パジェントによる「共通世界」構築の試み——『幕間』」では、ウルフも重要視していた、「個」の独立性を尊重しつつ、分散からいかに融合を生み出すかというテーマが引き続き扱われる。ウルフが『幕間』の中で

描いた、個を融合させる方法は、アーレントの「共通世界」の構築と同じプロセスをたどることが証明されていく。『幕間』の舞台は、第二次世界大戦直前に設定されている。不安な時勢が個々の登場人物たちの内面に影を落とすため、登場人物たちのコミュニケーションや相互理解が成立しない。著者によると、分散した「個」をつなげ、融合するためにウルフが作中用いた方法は、アーレントの定義する「共通世界」の構築方法と近似する。「共通世界」とは、複数の物体が同じ場所を占めることができないように、無数の人々の見解や視点がそれぞれ異なった場所に同時に存在する公的領域(226)のことである。『幕間』では、ラ・トロープのパジェントがアーレントの「共通世界」の役割を果たしていると指摘される。ラ・トロープの劇は、従来のパジェントの伝統とは異なり、普通の人々の日常を題材とし、観客をも巻き込み融合していく新しい形式である。役者と観客が一体となる設定は、自分も劇が描き出す歴史の流れの一部であるという意識を両者が共有することであり、誰しもがアーレントの概念である「共通世界」の作り手であるという一体感を創出する効果があると著者は分析する。パジェントによって生み出された「共通世界」の意識には持続性がないものの、ラ・トロープが次作の構想を練る場面に、ウルフが期待する「持続する『融合』」(259)の創出方法が示されていると著者は読む。ラ・トロープの次作では、特定できない、名もなき土地に舞台が設定されることで、固有名詞を持たない「非個人性」と「普遍性」が強調される。人が「個」を主張することをやめ、自意識から解放された状態で自己と向き合えば、他者との差異は取るに足らないものだと気づいたラ・トロープは、飾りをそぎ落とした単純な言葉による劇の構想を練る。ウルフは、特定の作者を持たない匿名の歌が文学の起源であると考え、真の芸術作品は、非個人性や普遍性を伴い、読者に作者個人の存在を意識させないものだと捉えた(254)。著者は、このウルフの文学観がラ・トロープに投影されていると読む。さらに、文学という芸術を媒体として融合を生み出そうとするラ・トロープの試みから著者は、ウルフの文学に対する期待を読み取っている。個々人が「個」を主張して孤立を深めるのではなく、文明以前の原初に立ち戻り、自意識や虚栄による小さな差異をそぎ落とした普遍的な人間としての「融合」を実現する力を、ウルフが文学に期

待したと結論づけた。

ところで、最終部である第三部の論考において、アーレントの議論の援用が他の章より少ない印象を受けるのはなぜだろうか。評者には、例えば第五章の『ダニエル』の分析で扱われている「分離」の議論にアーレントの「独居」の意味が含まれ、「交流」には、アーレントとは少し異なる解釈をしているものの、著者が全体の議論において力点を置く「親密性の領域」における「似たもの同士」や「わかりあえる [もの] 同士」(53)の交流という意味も含まれるように思われた。もし著者がこれらの議論を取り入れていれば、上記の印象は払拭できたのだろうか。いやそうしていたとしても、アーレントの概念だけでは作品を説明しきれないものを感じたであろう。例えば、著者はグウェンドレンについて、次のような指摘をする。彼女は貴族との結婚により、公的には勝利をおさめたように見られるが、グランドコート夫人としてふさわしい言動をするよう夫から常に監視される様は、精神的牢獄に閉じ込められているも同然であり、「第一の籠」である実家から、結婚によって「第二の籠」に移動したにすぎないと説明する(192-93)。これは、グランドコート夫人として「公的」な場で優越感に浸れる機会が増えたグウェンドレンが、公的領域に出ても、冷たい結婚生活に自ら足を踏み入れてしまった後悔や苦悩といった本音を、デロンダを除いては誰からも「見られ、聞かれ」ていない状態であること、つまりアーレントの「公的領域」における人のあり方の定義が当てはまりきらないことを示すものだと補足できる。このように、公的領域に存在しているからといって、複数の他者と自分の思想や感情を共有できるわけではないといった、アーレントの議論では説明しきれない現実生活の複雑さがあることを、エリオットがリアルに描いていることこそ、結論部で指摘すべきだったように思われる。しかし、このことに著者が気づいていないはずはない。『幕間』を扱った同部第六章において、アーレントの「共通世界」の構築方法と同じやり方で、分散する個人をつなげようとするラ・トローブのパジェントがもたらした効果が瞬時に消滅し、持続しなかったという指摘からも、アーレントの概念を現実社会で実現することが、しばしば困難であることが示唆されているからだ。個人同士や、個と社会との関係が入り組む現実の人生において、アーレントの思想、そし

ておそらくどのような哲学思想をもってしても完全には説明のつかない、人生というものの現実的な複雑さを、エリオットもウルフも認識し、だからこそ個が自分らしさを保ち、互いを大切にしながら社会の中で関わっていく生き方を、生涯真摯に追求したのであろう。この普遍的に重要な問題意識を両作家が共有していたこと、そしてアーレントの思想が、二人のこの問題に対する応答を作品から読み解く上でかなりの助けになることを、著者は証明した。本書は、複雑な人生を生き抜くために必要な力を、私たちが文学から確かに得られることを、三人の女性著述家たちの共通する視点を通して再確認させてくれる、すぐれた著作である。

日本におけるジョージ・エリオットの文献(2020年8月～2021年7月; 2000年1月～2020年7月の補遺・訂正)

- ・発行年月日に\*印を付したものは、前号までの文献(2000年1月～2020年7月)の補遺・訂正分です。  
なお、訂正分に関しては( )内→印を用いてその訂正箇所を明示してあります。

(1) 翻訳関係(エリオットの著作)

発行年月日	訳者名等	タイトル等	書名、雑誌・学会誌名等	巻号、発行所、頁等
2021.03.20 (令和3年)	廣野由美子	ミドルマーチ4	光文社古典新訳文庫、光文社、 485 pp.+1 p. [編集部]	「第7部 二つの誘惑」(pp. 7-203)、「第6部 日没と日の出」(pp. 205-431)、「読書ガイド」(pp. 432-71)、「シヨージ・エリオット年譜」 (p. 472-81)、「訳者あとがき」(482-85)

(2) 研究書関係(研究書の中の一部として収められているものも含む)

発行年月日	著者名等	タイトル等	書名等	発行所、頁等
2021.04.25 (令和3年)	廣野由美子	「まえがき」;「小説技法篇」;「1 プロローグ」;「2 麗辞」;「3 語り手の介入」;「4 ハソラマ」;「5 会話」;「6 手紙」;「7 意識の流れ」;「8 象徴性」;「9 ミステリー/サスペンス/サライズ」;「10 マジック・リアリズム」;「11 ポリフォニー」;「12 部立て/章立て」;「13 クライマックス」;「14 突候」;「15 エピローグ」;「16 小説読解篇」;「1 宗教」;「2 経済」;「3 社会」;「4 政治」;「5 歴史」;「6 倫理」;「7 教育」;「8 心理」;「9 科学」;「10 犯罪」;「11 芸術」;「あとがき」;「参考文献」;「索引」	小説読解入門—『ミドルマーチ』教養講座	中公新書、中央公論新社、273 pp.

(3) 概説書関係(事典・辞典、文学史、文化史等およびエリオットへの言及がなされている論文等を含む)

・なし

## (4) 新聞、雑誌(学会誌、紀要類)等

発行年月日	著者名等	タイトル等	雑誌・学会誌名等	巻号、発行所、頁等
*2017.03. (平成 29 年)	藤倉恵子	ハリウエルの「三匹の子豚」の文化史的読解(その2)——AT124 話型の英仏話との関連において	雑誌・学会誌名等 京都産業大学論集・人文科学系列	第 50 号、京都産業大学、pp. 245-73 ; エリ奥特への言及は pp. 249-50.
2020.09.30 (令和 2 年)	深澤 俊	『ダニエル・デロンダ』——ジョージ・エリオットの最後の小説	人文研紀要	第 96 号、中央大学人文科学研究所、pp. 307-20.
2020.11.25	深澤 俊	『ダニエル・デロンダ』を超えて	ジョージ・エリオット研究	第二十二号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 1-9.
2020.11.25	惣谷美知子	“An Extraordinary Fate”を読む——George Eliot, <i>Middlemarch</i> と Jane Austen, <i>Sense and Sensibility</i>	ジョージ・エリオット研究	第二十二号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 11-26.
2021.02.26 (令和 3 年)	廣野由美子	「沈黙の彼方」より——George Eliot の劇詩“Armgart”における声と <i>Middlemarch</i> の語り の方法	英文学評論	第 93 集、京都大学大学院人間・環境学研究科英語部会、pp. 37-60.
2021.03.11	Miyuki Amano	Edith Wharton's Response to George Eliot's <i>Adam Bede</i> : Sympathy and Charity in <i>Summer</i>	県立広島大学人間文化学部紀要	第 16 号、県立広島大学、pp. 21-31.
2021.03.15	橋川裕之	ジョージ・エリオットのイタリア紀行——フィレンツェ編	早稲田大学高等研究所紀要	第 13 号、早稲田大学高等研究所、pp. 89-140.
2021.03.31	矢野奈々	George Eliot's heroines and the Dark Lady in Shakespeare's <i>The Sonnets</i>	目白大学人文学研究	第 17 号、目白大学、pp. 35-47.
2021.04.30	川崎明子	『サイラス・マナー』における植物——漸進的発展の跳躍的語り	英国小説研究	第 28 冊、『英国小説研究』同人、英宝社、pp. 48-79.
2021.04.30	新野 緑	ジョージ・エリオットと〈一人称の語り〉——「エイモス・ハートン師の悲運」を中心に	英国小説研究	第 28 冊、『英国小説研究』同人、英宝社、pp. 29-47.



(5) 書評・新刊紹介関係

発行年月日	書評者名等	タイトル等	掲載雑誌名等	発行所、頁等
2020.11.25 (令和2年)	佐藤エリ	矢野奈々著『ダーク・ヒロイン—ジョージ・エリオットと新しい女性像』(彩流社、2017年) 318頁	ジョージ・エリオット研究	第二十二号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 27-35.
2020.11.25	津田聖子	矢野奈々著『ダーク・ヒロイン—ジョージ・エリオットと新しい女性像』(彩流社、2017年) 318頁	ジョージ・エリオット研究	第二十二号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 27-35.
2020.11.25	中島正太	Dermot Coleman, <i>George Eliot and Money: Economics, Ethics and Literature</i> . Cambridge Studies in Nineteenth-Century Literature and Culture (Cambridge UP, 2014), vi+242 pp.	ジョージ・エリオット研究	第二十二号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 51-55.

(6) 翻訳文献関係 (研究書、論文等)

発行年月日	著者名、訳者名等	タイトル等	書名等	発行所、頁等
2021.01.10 (令和3年)	エレン・シヨヴォオルター著、[日本看護協会出版会編集部訳]	フロレンス・ナイチンゲールが抱いたフェミニストとしての不満：女性、宗教、そして『思索への示唆』	フロレンス・ナイチンゲール著、木村正子訳、『オランダ：ヴァクトリア朝の理想的な女性像への反逆』所収論文	ナイチンゲール生誕200年記念出版、日本看護協会出版会、pp. 127-173; エリオットへの言及は pp. 148, 149n18, 154, 157-58, 157n34, 159n12.
2021.05.	レベッカ・パクストン、リサ・ボワイテイニング編、向井和美訳	ジョージ・エリオット (メアリー・アン・エヴァンズ) George Eliot (Mary Anne Evans) 1819 ~ 1880 年	哲学の女王たち：もうひとつの思想史入門	晶文社、pp. 87-96; 他に pp. 18 (肖像画)、225, 243 でもエリオットに言及

(7) 注釈書、注付き教科書関係  
・なし

## (8) その他 (ニューズレター、書誌等)

発行年月日	著者名等	タイトル等	雑誌・学会誌・書名等	発行所、頁等
2020.11.25 (令和2年)	大嶋 浩	日本におけるジョージ・エリオットの文獻 (2018年8月～2020年7月; 2000年1月～ 2018年7月の補遺・訂正)	ジョージ・エリオット研究	第二十二号、日本ジョージ・エリオット 協会、pp. 57-65.
2021.06.01 (令和3年)	植松みどり	ジョージ・エリオットと私	George Eliot Newsletter of Japan	第25号、日本ジョージ・エリオット協会、 pp. 1-2.
2021.06.01	(濱 奈々恵)	特別企画「コロナ禍とわたし」	George Eliot Newsletter of Japan	第25号、日本ジョージ・エリオット協会、 p. 2.
2021.06.01	宇佐見太市	コロナ禍下の想念	George Eliot Newsletter of Japan	第25号、日本ジョージ・エリオット協会、 p. 2.
2021.06.01	海老根 宏	現代『デカメロン』	George Eliot Newsletter of Japan	第25号、日本ジョージ・エリオット協会、 p. 3.
2021.06.01	高野秀夫	新型コロナと私	George Eliot Newsletter of Japan	第25号、日本ジョージ・エリオット協会、 p. 3.
2021.06.01	谷 綾子	コロナ禍でのオンライン授業	George Eliot Newsletter of Japan	第25号、日本ジョージ・エリオット協会、 p. 3.
2021.06.01	富田成子	令和二年——コロナの春	George Eliot Newsletter of Japan	第25号、日本ジョージ・エリオット協会、 p. 3.
2021.06.01	濱 奈々恵	「リモート」を楽しむ	George Eliot Newsletter of Japan	第25号、日本ジョージ・エリオット協会、 p. 4.
2021.06.01	中島正太	コロナ禍と私	George Eliot Newsletter of Japan	第25号、日本ジョージ・エリオット協会、 p. 4.
2021.06.01	樋口陽子	2019 George Eliot Bicentenary Conference at University of Leicester	George Eliot Newsletter of Japan	第25号、日本ジョージ・エリオット協会、 p. 4.
2021.06.0	矢野奈々	コロナと YouTube	George Eliot Newsletter of Japan	第25号、日本ジョージ・エリオット協会、 p. 4.

\* 記載事項の間違い、遺漏等にお気づきの方は、文献委員の代表（大嶋）までお知らせください。

『ジョージ・エリオット研究』(The George Eliot Review of Japan)  
投稿規程(2022年度版)

1. 投稿者は原則として日本ジョージ・エリオット協会会員であること。
2. 論文は未発表のものであること。ただし、すでに口頭発表し、その旨明記している場合は、審査対象とする。
3. 論文原稿は、原則として Microsoft Word で作成し、A4 用紙に横書きしたものとする。

日本語論文の場合は、1 頁 35 字×30 行で 17 頁以内、英語のシノプシス 600 語以内(ネイティヴチェックを受けることを推奨する)。英語論文の場合は 7000 語以内(ネイティヴチェックを受けることを推奨する)。上記の長さには本文および注を含むが、表、グラフ、数式、図版および論文末尾に加える引用文献についてはこの制限外とする。また、図版等は、挿入箇所と大きさを原稿の中で指定すること(例：原稿の p. 5 に 20 字×25 行の大きさで図 1 を挿入)。

以上の点をチェックシートに記入し、確認する。チェックシートの詳細については、学会ホームページの「投稿規程・チェックシート」(<http://www.g-eliot.jp/toukougitei2021.pdf>)を参照のこと。

4. 論文原稿 1 部とチェックシート 1 部を、添付ファイルで、日本ジョージ・エリオット協会事務局 ([georgeeliot.japan@gmail.com](mailto:georgeeliot.japan@gmail.com)) に送付する。
5. 書式上の注意
  - イ. 原則として、日本語は MS 明朝、英語は Times New Roman を使用。
  - ロ. タイトルは 14 ポイントで太字、章題は 12 ポイントで太字、氏名・本文・注・引用文献等は 12 ポイント、独立引用文は 11 ポイントとする。
  - ハ. 注と参考文献は、それぞれ分けて原稿末尾にまとめて付けること。
  - ニ. 外国人の人名、地名、書名等は少なくとも初出の箇所で原名を書く。
  - ホ. その他、書式の細部に関しては、原則として、*MLA Handbook, 8th edition*、あるいは *MLA Handbook, 9th edition* に準ずる。なお、原稿のタイトルのあとに依拠したスタイルマニュアル(例 *MLA 第 8 版*、*MLA*

第9版』を明記すること。

6. 書評原稿は、1頁35字×30行で8頁程度以内を基本とする。その他の規定や書式については、論文原稿に準ずる。ただし、英語のシノプシスを付ける必要はない。表題（書物の情報）は、著者（编者）名・タイトル・シリーズ名・出版社・出版年・頁数等を記載する。表題の記載例は学会ホームページの「投稿規程・チェックシート」（<http://www.g-eliot.jp/toukougitei2021.pdf>）を参照のこと。
7. 原稿の採否および掲載の時期は編集委員会が決定する。
8. 原稿の締切日は4月1日（厳守）とする。
9. 執筆者の校正は初校のみとする。校正は植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正加筆は原則として認められない。
10. 掲載された論文等は一定期間（原則一年間）を経た後に電子化され、インターネット上に公開される。公開を望まない場合は、事務局に申し出ることにより、非公開とすることができる。

\*投稿にあたっては、学会ホームページの「投稿規程・チェックシート」（<http://www.g-eliot.jp/toukougitei2021.pdf>）をご覧ください。

## 執筆者一覧

佐藤 エリ	(Eri Satoh)	神戸女学院大学非常勤講師
小林 英里	(Eri Kobayashi)	成蹊大学教授
濱 奈々恵	(Nanae Hama)	福岡大学外国語講師
藤原 知予	(Chiyo Fujiwara)	大阪産業大学特任准教授
大嶋 浩	(Hiroshi Oshima)	兵庫教育大学名誉教授

## 編集後記

今年度も、昨年に続き、コロナ禍の中、厳しい一年となりました。投稿論文等の数が少なく、審査はその分楽になりましたが、学会誌としては例年になく分量的に乏しいものとなりました。それゆえ、急遽、来年度に投稿予定であった書評を前倒して投稿していただき、審査にかける対応をとりました。最終的に、本号は、論文1編、書評3編、及び書誌文献データの構成となっています。分量的には物足りなさを感じざるを得ませんが、掲載された論文、書評はいずれも読み応えのある充実した内容のものとなっていると思います。投稿者の皆さま、そして編集委員、協会事務局、出版元の大阪教育図書の皆さまに心よりお礼申し上げます。

現在、コロナワクチン接種等が進んでいるようですので、来年度はコロナ禍の影響も多少軽減されることが期待できるのではないのでしょうか。研究する時間の確保もままならない会員の方々が多くいらっしゃると思いますが、研究の継続を途切らせることなく、論文や書評の投稿に挑戦していただきたいと思います。

学会誌の投稿規程が改定されました。投稿論文の長さが、日本英文学会の投稿規程に準じて、これまでの規程よりもかなり長いものとなっています。詳しくは本号の『『ジョージ・エリオット研究』(*The George Eliot Review of Japan*) 投稿規程 (2022年度版)』および学会ホームページの「投稿規程・チェックシート」(<http://www.g-eliot.jp/toukokuitei2021.pdf>) をご覧ください。

2021年11月 大嶋 浩

ジョージ・エリオット研究・第二十三号  
(*The George Eliot Review of Japan: The Twenty-Third Issue*)

編集委員 (Editors)

大嶋 浩 (Hiroshi Oshima, Chief Editor)  
池園 宏 (Hiroshi Ikezono)  
岸本 京子 (Kyoko Kishimoto)  
窪田 憲子 (Noriko Kubota)  
永井 容子 (Yohko Nagai)  
谷田 恵司 (Keiji Yata)

ジョージ・エリオット研究・第二十三号

---

発行日 2021年11月25日  
編集・発行 日本ジョージ・エリオット協会  
代表者 福永 信哲  
印刷所 大阪教育図書株式会社

---

発行 日本ジョージ・エリオット協会  
(The George Eliot Fellowship of Japan)  
徳島文理大学香川校 中島正太研究室内  
〒769-2193  
香川県さぬき市志度 1314-1 徳島文理大学香川校  
中島正太研究室内  
電話：087-899-7100  
E-mail: georgeeliot.japan@gmail.com

---